

特集 魔法の習慣12

第4章

「一期一会」を大切に舞台を作る

——金剛流能楽師 宇高 竜成さん



瀧 貴美子
埼玉県中小企業診断協会

1. 伝統を YouTube に

宇高竜成さんは能楽師である。能楽とは日本の代表的な伝統芸能である。600年以上の歴史を持ち、海外でも高い評価を得ている。

宇高さんの所属する金剛流は、シテ方（主役。謡、仕舞などを担当）五流の1つである。芸風は、舞金剛といわれる技の多彩さに上方風の優美さを加えている。



金剛流能楽師の宇高竜成さん（写真提供：宇高竜成さん）

宇高さんは能楽師の家に生まれ、3歳で初舞台を踏んだ。能楽はお堅い世界と思われがちだが、宇高さんは新たな取組みとしてYouTubeでの発信を続けている。その動画タイトル名も、「タツシゲの部屋」。この能楽師の持つ魔法の習慣を探るべく、取材を申し入れた。

Zoom取材にて、独自に作成した和のバーチャル背景で登場したあたりは、さすが現代の能楽師である。宇高さんは、太く響く声で語ってくれた。

2. 音で楽しむ能楽

宇高さんは、コロナ禍の中にあって、能楽師として世のために何ができるかを考えた。その答えが、「能楽を通じて世の中を元気にしたい」ということだ。

もともとYouTubeを見るのが好きで、以前から温めていた企画であった。そして、行き着いたのがライブ配信。見ている人と同じ時間の共有ができるからである。

しかし、映像の配信はせずに、音だけを流す。音から能楽の世界を想像してほしいからである。その臨場感は、能楽の舞台のそれに近い。研ぎ澄まされた能楽の世界を提供することが狙いだ。

能楽をこれまでと違う角度から楽しみ、人々に元気になってもらおうという趣向である。



舞台は一期一会（写真提供：宇高竜成さん）



能面と宇高さん（写真提供：宇高竜成さん）

3. 一期一会

宇高さんは、舞台でのハプニングを大事にする。ハプニングとは、思いがけないことが起きる、つまり出来事しゅつらいすることだ。言い換えると「一期一会」だと宇高さんは言う。つまり、完成したものを観客に見せるのではなく、役者同士のその場の呼吸で舞台を仕上げていく。そこで起こるハプニングも舞台的一幕として考える。いつも同じように演じているように見えても、常に舞台は一期一会で繰り返されているのだ。

能楽では、直前リハーサル以外に合同練習はない。このため、舞台での立ち回りは、まさに一期一会である。役者が互いに引っ張り合い、せめぎ合い、攻防戦を繰り返す。能楽の世界には、不確定要素がたくさんある。役者も観客もその瞬間を楽しむ芸能だ。

能楽は、「セッションのような感覚です」と宇高さんは話す。セッションとは、相手の出方で自分を変える、そのときにしかやらないようなやり取り、かけ合いということだ。そのときにしか起こらないものを、演じる側も観る側も作っていくという営みなのである。

4. 能面が主役

能楽では、能面が重要な役割を果たしている。その割合は、舞台全体の3割に及ぶ。役者は能面の仕事をサポートするともいえる。

能面は、役者が引き出さない限り、表情に変化が現れない。正確には、観ている人に表情があるように見せるのである。役者の技術で見せているのではなく、能面自体が本当にその表情をしたように見せることができるかどうかにかんじて演じる醍醐味がある。観客は、千差万別に繰り返される表情に引かれる。

「舞台の上で、役者は能面に体を預けるのです」

本番では、役者と能面の双方がマッチングすることで、10割の演技が形作られる。能楽は、一期一会でしか得られない真剣勝負の世界だ。本番では、何が起きるかわからない。そこはあえてブラックボックスのままにして偶発性を楽しむ。

5. 褒められたことでスランプに

20歳代半ばのときに、舞台をともした厳しい先生に「お前、謡がうまくなったな」と褒められた。しかし、それが3年にわたるスランプのきっかけになってしまったという。

能楽師は、常に改善を重ねて自分の成長を追い求めなければいけないのに、褒められたことで自分の中で達成感が生まれてしまった。その結果、成長しようとする努力を怠った。「3年間同じ場所に留まり続けてしまったのです」と宇高さんは当時を振り返る。

「褒められたとき、すごく成長し、世界が変わったような達成感がありました。他人からも成長したように見えていたようです」



能を舞う宇高さん（写真提供：宇高竜成さん）

しかし、次の舞台でも同じことをやればよいと思ってしまっていた自分がいた。能楽で最も大事にしなければならない一期一会に向けた努力を、完全に否定してしまったともいえる。

この時期、身近な人からは舞台の後に「今、演技を流してやっていたね」と見抜かれることも少なくなかった。周囲から見ても明らかに成長が止まってしまったのだ。

6. 一流になるための魔法の習慣

(1) 見て盗んで飛躍する

スランプに気づいたとき、宇高さんは何をしたのか。自分をゼロの状態にし、先輩や同僚の役者の動きを必死に見て、自分が見えていないものを貪欲に探していった。

能楽では、主役の役者が裏方を担当することもある。自分が裏方に回ったときに、主役の舞台の表現を注意深く観察した。そして、「盗んだ」のである。さらに「盗んだ」ものを自分の演技力の向上に結び付けたのである。

稽古はリサーチだ。目的すら見えなくて手段もわからない中、見えていないものを見つける作業が必要不可欠なのだ。動きやスピードの背景となる思想を徹底的に分析し、自分の取り組むべき姿を見出した。

また、舞台の出来事をすべて目に焼き付けることに努めた。これを、舞台に携わる中で重要な習慣として位置づけたのである。そして継続した。これにより、自分の経験値を最大限に増やした。

「見て盗むということは、使える色を多く持っておくということです。その中から、舞台に応じて使いたい色を演じ分けるのです」

学びを怠らないことは一流への魔法の習慣の1つといえるだろう。

(2) モノに愛情を注ぐ

宇高さんは最近、掛け軸の収集を始めた。現在、60軸以上を所蔵しており、近々100軸に及ぶという。能楽の稽古に、演目に合った掛け軸をかける。

「弟子が掛け軸に興味を持って、さまざまなことを聞いてきます。その説明をするのが至福のときなのです」

そう言って、宇高さんは笑う。掛け軸をかけると、自分の気持ちを高揚させることができる。それが本番へのパフォーマンスにつながるのだ。

宇高さんは、掛け軸の世界観にロマンを感じている。今や掛け軸は、趣味の領域を超えて、稽古を演出するうえで欠かすことのできない小道具になっている。

収集した掛け軸は大切に保管し、丁寧に手入れをしている。お気に入りの靴を丹念に磨き上げるがごとく、モノに愛情を注ぎ、こだわりを持って接する。これも魔法の習慣の1つではないだろうか。

(3) 「かつこよく」生きる

宇高さんは、かつての師匠の所作に感銘を受けたことがある。以前、裏方として舞台を支えていたときに、30歳も年が離れている自

分に対して、師匠が「ありがとう」とねぎらいの言葉をかけてくれたのだ。

かっこよかった。将来、自分が師匠と呼ばれる立場になっても、この気持ちは常に持っていたいと肝に銘じた。こだわりを持っている人たちの何気ない一言は、自分の世界を広げてくれるのだ。

人は誰でも歳を取る。しかし、歳を重ねた人の柔軟な発想力に自分たちが驚かされることもある。

「能楽では老いも武器になるのです」

角が取れて余分な勢いがなくなる。老いにくじける役者もいるが、戦い続ける役者は伸び続けるのだという。その老いが芸能をますます磨いていくのだ。宇高さんは、歳を重ねても、常に新しいことに挑戦する能楽師を目指している。それがかっこいいのだ。

常にチャレンジし続けて「かっこよく」生きることを目指す。これもトップランナーたる宇高さんの魔法の習慣なのだろう。



常に真剣勝負。そして、チャレンジを続ける（写真提供：宇高竜成さん）

(4) 世界を股にかける

宇高さんは何度もフランスを訪れている。20歳代のときに能楽を教えたフランス人に、現地の演劇を教えてもらうためである。今では共同で作品を作り、上演も行っている。

日本の能楽とフランスの演劇。表現は異なるが、根底にあるものは同じ。人と人が舞台を通じてつながることがとても嬉しい。お互いに伝え合うことが大切なのだ。

宇高さんには夢がある。世界各地の伝統芸能を一同に集め、国際的フェスティバルイベントを開催することだ。国籍などで垣根を作らない気持ちもまた、一流人の習慣である。

7. 多くの人に愛される能楽でありたい

宇高さんが見る能楽の未来像は、どのようなものなのか。

「老若男女を問わず多くの人に、真に能楽を好きになってもらいたいです。一期一会の妙を味わい、そして楽しんでくれる人が1人でも多くなるとよいです」

若き能楽師、宇高竜成さんがチャレンジを続ける限り、きっとこれからの能楽の世界が、切り拓かれていくだろう。

宇高 竜成

(うだか たつしげ)

能楽師シテ方金剛流。1981年生まれ。二十六世金剛流宗家・金剛永謹および父・宇高通成に師事。初舞台は3歳。子方時代を経て、プロの能楽師となる。舞台活動の傍ら、初心者にもわかりやすく楽しめる「能楽ワークショップ」を企画し、パリ、韓国、アメリカなど海外でも展開する。現在、京都府を中心に活動中。



瀧 貴美子

(たき きみこ)

大学卒業後、総合商社で米国からの穀物の輸入貿易実務を担当。退社後、アメリカで暮らしながら美術館でボランティア。日本文化を紹介することに心血を注ぐ。宇高竜成氏とは遠戚にあたる。現在、中小企業2社の経理一般事務と輸入業務を担当。2020年中小企業診断士登録。

